

『Ren』

作者 浅羽 一

「私の人生なんて、ずっとついてない事ばかり。もう、いい加減にうんざりなのよ。だから、お願い。殺し屋さん」

辺りには他に誰もおらず、きつと少しくらい大きな音を立てても平気だろう、とてもとても広い夜の公園で。彼女はペンキのはげたベンチに座り、青白い街灯に照らされながら、自嘲めいた微笑みを浮かべると…。

「私を、殺して」

とても静かに、両の瞳を閉ざしていった。

そうしていつしか、無言で目を瞑る彼女の顔から、一切の表情が消える。その瞬間、ベンチの前に立って彼女を見下ろしていた彼は、いよいよ彼女が覚悟を決めたのだと悟っていた。

だから、彼は…。

「……………」

…何か言うべきかも知れないと思ったけれど、結局は今の時点で言えるべき言葉を見つけれず。代わりに、彼女の耳に届くように、漆黒のコートの下から取り出した銀色のリボルバー拳銃を手中で弄ぶ風に操作し、しばらく無機的な金属音を響かせた。

温情も愛情もない、同情さえない、硬質な音。それでも彼女は、些細な反応さえ示さず。

やがて彼は、それが本当に矛盾した行為だと知りつつも、そつと彼女のこめかみに銃口を当てて、撃鉄を起こし。

「…ありがとう、殺し屋さん」

無言のまま引き金を引いた。

1

ようやく熱気と興奮の余韻も消え去り静かになった店内で、「お疲れさん」と、マスターの藤間からカウンター越しに差し出されたグラスを、椅子を引いた瀬奈は軽い笑みを返して受け取った。手の平全体に伝わる冷たさは、火照った体を醒ますどころか余計に熱さを思い出させたけれど、決して嫌な感触では無かった。それはきつと、気取った比喻を使うのならば、命を燃やしていると実感出来る熱さだった。

瀬奈は、そんな気分の名残惜しさを抱きつつも、せつかくのグラスの中身がぬるくなつてしまわない内に、喉の奥へと流し込んだ。途端、口腔内の粘膜に鋭い刺激が走り、体の

内側をそれさえも呑み込む清涼感が滑り落ちた。冷たいのに熱い、熱いのに冷たい、おかしな言葉遊びが実感として胸の中に生まれると、汗で濡れた肌に張り付いていたタンクトップの不快感さえも、不思議と心地よくなった気がした。数分前まで照明の光を浴びて濡れているように輝いていた長い黒髪は、ゴムによって背中であつた豪快に束ねられていて、露わになつたうなじはすでに仄かな朱に染まつていた。

「良いわね、これ」

実際、そのカクテルは普段に飲んでみてもきつと美味だろうと確信出来るもので、いっそ、熱いレースに勝利した英雄に降り注ぐシャンパン・シャワーにも引けを取らない完成度だった。

「新しいやつ？」

「正解」と、瀬奈の問いかけに藤間は胸を張って頷いた。「何て言うか、爽快だろ。これからどんどん暑くなるしな、真夏に向けての新商品だ」。

「確かに、ピッタリかもね」

と、その評価に、藤間の左の眉と口元の髭がぴくりと跳ねた。瞬間、瀬奈は内心でしまつたと後悔した。

案の定、藤間は心底から誇らしそうな顔で語り出した。「結構な、苦勞したんだぜ。ちよつと珍しい銘柄のドライ・ジンをベースに、酸味の利いたシークアサーと」。

「ああ、はいはい。説明は良いって」。だが、瀬奈はすかさず手を振って藤間の話を寸断した。「マスターって酒自慢が始まると長いから」。

「…なんだよ、酷い奴だな」

「でも、自覚はあるでしょ」

「ははは。まあな」。藤間は大げさな仕草で肩をすくめ、あつさりとは肯定した。

決して「長い付き合いだから」と他人に自慢出来るほど彼らの出会いは古くない。それでも、二人とも互いの言葉に悪意がないことなど分かりきっていた。この店に対する想いが、そのまま彼らの絆になつていたので。

店の主である藤間にとって、まさしくこの店は人生の場であり夢の結晶であつた。そしてまた瀬奈にとつても、此処はアルバイトとしての勤め先である以上に、大切な夢へと繋がる道そのものだった。

「おめでとう。デビューが決まつたんだってな」。椅子に座つて自慢のカクテルを味わつている瀬奈へと、藤間が優しい笑みを向けた。

彼女もそれに喜色満面の笑みで応えた。「うん、ありがとう。マスターと、この店のおかげだよ」。

「その通り、心の底から感謝しろよ……って言いてえとこだけだな。何言つてんだ、お前さんの実力だよ」

「まあね」

「いやいや、そこは謙遜だろ、普通」

「あはは。でもさ、本当に、此処は私に『場所』を与えてくれた所だから。大丈夫、もうとつくに心の底から感謝しまくってるよ」。瀬奈は柔らかい動作で頭を下げると、くると椅子を回し、改めて他に誰もいなくなった店内を見渡した。

さして大きくない建物ながら、客や他のスタッフが全ていなくなったそこはやけに広々

としていた。

点在する丸テーブルと椅子のセット。営業中は最低限の光しかもたらさない天井の照明は、今は完全に明るくなっている。店の隅、カウンターの入り口のドアを挟んで対照的な位置には、人一人が座れるだけの空間を確保された複数の機材に囲まれたブース。そして瀬奈達の正面に見えるのは…。

「本当にさ、感謝してるんだ。だって、私にとって此処は、どんなホールやドームにだって負けないくらい、最高に素敵なステージの一つなんだから」

規模だけで言えば、それらとまともに比較するまでもなく、簡単な照明と音響器具を備えている程度の小さな舞台だ。そこに立つ演者だって、有名を目指している者こそいても、すでに売れているような人物はいない。

けれど、小屋の大小に関係なく、少なくとも瀬奈にとって此処は紛れもなく本物のステージだった。現に、つい先ほどまで彼女はそこに一人で立ち、何人も客を相手に演奏を披露していたのだから。

「この場所を与えて貰った恩は、一生忘れないよ。それに、この舞台上がって、生まれて初めてちゃんとお客さんの前で演奏した日の事もね」。瀬奈はカウンターにグラスを置くと、隣の椅子に載せていた愛用のアルト・サクスを撫でて、はにかんだ。引き締まった体にタンクトップとタイトなレザー・パンツ、ヒールの高いブーツ。舞台上ではさらに帽子やジャケットが加わる場合もあるが、演奏が熱を帯びてくると結局は脱ぎ捨てられる。やっと二十歳になったばかりのミュージシャンにしてはおそらく地味な衣装だったろうし、下手をすれば男っぽくなり過ぎてしまう格好だったが、愛おしそうに楽器を見つめる眼差しのおかげなのか、彼女の姿からは女性的な魅力的が十二分に溢れていた。老けているというわけでは決してなく、それは年齢を超えた艶やかさだった。

「元々は単なるウェイトレスとして雇ったつもりだったんだがなあ」。そんな彼女より二回りも年上の藤間は、からかいじみた口調とは裏腹に温かい笑みを浮かべていた。「それが今じゃこの店一番の人気者だ」。

「最初の頃は『お前は誰だよ』って感じだったけどね。実際、思い出すと笑っちゃうくらいぼろぼろだったし。マスターがフオーローしてくれていなかったら、きっともっと大変だったよ」

「そこまで言うんなら、一晩くらい俺の相手をしてくれたって良いんだぜ」

「うっわ、最低。せつかく人が良いこと言ってるのに、そんなんだから嫁どころか彼女も出来ずに一人寂しい老後を送る羽目になるんだよ」

「…いや、お前の方こそ言い過ぎだろ。って言うか、何でずっと独り身決定なんだよ」

「女の勘ね」

「ただの悪口じゃねえか」

「違うわよ。中年親父が言うのとセクハラだけど、可愛い女の子が言う分には愛嬌だから」

「自分で自分を可愛いって躊躇無く言える時点で、お前もかなり良い性格してるよ」

「マスターもねえ、黙ってシエーカーを振っている分には、渋い感じで悪くないのにねえ」

「大きなお世話だ」

「喋らなきゃ良いのに」

「馬鹿野郎。いい女を口説くのは、礼儀であり、男の浪漫ってやつなんだよ」

「何？もしかして、それも口説き文句？」

「だったらどうする？」

「そうねえー…」

と、瀬奈は勿体ぶるように言葉を彷徨させた後で、「やっぱり、だるめ」と楽しそうな口調で、しかしながらきつぱりと言った。「だって私、ちゃんと好きな人がいるもんね」。藤間はそれに芝居がかった態度で首を左右に振ってから、不満そうに「女ってのはいつもこれだ」。

「もう、泣かないでよ、マスター」

「泣いてねえよ」

「まあ、泣きたくなる気持ちも分かるけどさ」

「いやいやいや、人の話を聞けって」

「その代わりに私をもっと有名になって、いつか世界中を飛び回れるくらいになったとしても、たまにはちゃんと此処に帰ってきて、マスターの前でライブをして上げるからさ」

「ほお、そいつは嬉しいね」

「出演料は高いけど」

「…金取るのかよ」

呆れる藤間に明るい笑い声を返す姿は、男性顔負けの力強さでサククスを歌わせる舞台上と違い、年相応の雰囲気放っていた。

「ああゝあ」

だが、瀬奈は不意に肺に溜まった息を全て吐くような声を出し、一転してかすかに寂しげな表情を浮かべた。「マスターとこんな馬鹿話したり、常連のお客さんやみんなと一緒に騒いだり、それも、とりあえずは今度のライブで最後になるんだよね」。

「何だそりゃ」。けれどそれに応える藤間の声は、やはり気楽そうなもので、だからこそ彼の真摯さが伝わってくるものだった。「お前、さっき自分で言っただろ、『帰ってくるって』」。

「それは、そうだけど…」

「アマでもプロでも関係ねえよ。自分自身のプライドを抱えてあそこに立って演<sup>や</sup>る限り、ジャズでもロックでも、何なら演歌でもパンクでも、この店はいつでも誰でも平等に受け入れる」。無人のステージをそれでも真っ直ぐに見つめる彼は、あたかも憧れのスターを前にした子供のようだった。

「確かに、お前にとつて本当の戦いは、これからだ。きつと、プロとしてデビューしたら、いずれは『好き』って気持ちだけじゃ回らない時もあるだろうし、求められるものだって今よりも遙かに厳しくなるだろう。けどな、お前がどんな時でも、この店だけはずっと変わらずに此処にある。ちよつとした事で逃げ戻ってくるのはお断りだが、そうじゃないのなら、いつでも帰ってきて、好きなだけ吹けば良いさ。気分転換くらいにはなるだろうよ」

「マスター…」

「それにまあ、もしも本当にプロで食いつぱぐれても、その時はその時でまたこの店でプレイヤー兼ウェイトレスとして雇ってやるから」

「…だからさ、何でいつつもいつつも最後に余計な一言を付けるかなあ」

「今のは親心だよ」

「そうだね。変に心配性でうるさい父親って、娘にとってはうざいだけの相手だもんね」。そう言いながらも、いつしか瀬奈は再び気の置けない感じの表情へ戻っていた。

「ねえ、マスター」

「：何だよ、気色悪い声を出して」

「ちよっと真面目に聞いて」

「はいはい」

「あのね、マスター。私の人生ってさ、本当に最悪な事ばっかで、ついてない事ばっかりだったけど、でも、マスターやこの店と出会えた事は、『幸運だった』って胸張って言えるよ。だから、言わせて」。それから瀬奈は立ち上がり、深々と頭を下げ「本当に、ありがとう」。

すると藤間は、それに一瞬だけ奇妙な、或いは結婚前夜の娘を見送る父親めいた顔をすするも、やがて瀬奈が頭を上げるよりも早く「おいおい、似合ってたねぞ」。

「：やっぱりさ、マスターは死ぬまで独身だよね」。ややあって再び椅子に座った瀬奈の第一声は、心底からの感想だった。「ふん、お前が暗い事を言うからだよ」と、当の藤間はそんな皮肉さえ面白がっている様子だったけれど。

「人生の善し悪しなんか、自然に死ぬ、その一瞬前にやっと分かるんだ。それまではどんな事があったって、それらは所詮、全部ただの通過点だよ。重要なのは、そこから自分にどんな意味を見出して、どんな価値を与えてやるのだった。むかつく時もあるし、役に立ちそうもない経験だって多いけどな、それでも、何の意味も価値も無いものなんぞ、この世には一つもねえよ」

「死にたくなるような辛い出来事でも？」

「それでも生きていられるんなら、それもまた経験だろ。人間ってのは、傷を知らない痛みを分からない難儀な生き物だからな。勿論、痛みなんかまるで無い人生も平和で幸福だろうが、それでも、辛さを全く知らない人間は、自分が幸福だって事にも気付けないもんさ」

「マスターも色々経験してるんだね」

「当たり前だろ。これでも経験豊富な男だからな。そこら辺の童貞とは違うんだよ」

「そうだね。ちよっと見直したらすぐに下ネタって、もう変態だもんね。まだ童貞君の方が可愛くて良いわ」

「お前ももつと大人になったらな、いずれそれじゃ物足りなくなるんだよ」

やけに自信満々な予言に、瀬奈は冷たい視線を向けて、これ見よがしの溜息を吐き、「絶対になりませんよ。って言うか、マスターって本当にデリカシーに欠けてるよね」。

「そう言うお前は、『デリカシー』って言葉の意味、分かってるんだろうな」。応じる藤間も、その指摘だけはやけに冷静な口調だった。

と、その時だった。唐突にカウンターの端から古めかしいベル音が鳴り響いた。

「珍しいな、閉店後に電話なんて」

「お客さんかな」

「ああ、良い良い。俺が出る。お前はそろそろ帰る支度でもしとけ」

「でも…」

「ライブで疲れてるだろ。デビュー祝いの代わりだ、今夜の片づけは俺がやっつくよ」  
「安いお祝いだなあ」

「うるせ。貰えるだけ感謝しろ」。そう言つて藤間は急かすように鳴っている電話の受話器に手を伸ばす。

瀬奈はそれに「はいはい、分かっていますよ」と可愛らしいお辞儀を返し、それから傍らのサックスを持って席を立とうと一。

「おい、ちよつと待て」

しかし寸前で藤間に呼び止められた。

そして彼はさらに、何やら僅かに困惑している風に曖昧な表情をして、「お前に代わつてくれてよ」。

「私に？」

「ああ。何か、業界関係の人間みたいなんだが、聞いたことの無い名前だな」

「ふりん、誰だろ」

「仁村にむらつて名乗ってるが、どうする」

「良いよ、会社の人とかかも知れないし」と、受話器を受け取った瀬奈は、いきなり声を余所行きにして「はい、もしもし」。

藤間はそんな女声に軽く苦笑をしつつ、カウンターのの上に置かれたままだったグラスに手を伸ばして。

「…あなた、誰」

あまりと言えば硬い瀬奈の声が発せられたのは、彼がグラスを掴み上げた、その瞬間だった。

2

「ですから、言葉通りの意味ですよ。崎谷さきや瀬奈…いえ、田宮たみや瀬奈さん」

客のまばらなファミリー・レストランの一角で、眼前のソファ席に座る三十代半ばほどの男が口にした単語に、瀬奈はきちんと上着を着ているにも関わらず全身の毛穴が急速に縮まっていくような気分を味わった。実際には、それを耳にした途端にそこから嫌な汗がどつと溢れ出していた。

「どうして…」。力任せに肺を握られてしまっているかのごとく、ろくに息を吐くことさえ出来なくなっていた彼女にとって、それは弱々しくも精一杯の問いかけだった。

果たして、自称「音楽デューサー」で「仁川」と名乗った男は、「いえ、たまたまですよ」と粘着性のありそうな笑みを浮かべて言った。洒落者風に着崩されたベージューのスーツや、いかにも業界人ですと言わんばかりに身に付けられている指輪やピアスなど、軽薄そうな外見に相応しく、明らかに状況を楽しんでいる声音だった。「たまたま、あなたが

今度にデビューすることになったのと同じように、私の方でも新人を一人、デビューさせる予定でしてね。しかも、やはりあなたと同じくフュージョン系で若い女性サックス・プレイヤーを」。

「…それが一体、私とどういう関係が」

「実はですね、その彼女の父親―ああ、とある企業の社長さんなんですけどね、その人が言うんですよ。『やっぱ、娘をデビューさせるからには大手からが良い』ってね。まあ、当然と言えば当然なんですけど」

「……………」

「で、ですね。こちらとしては、このジャンルでは権威と人気と共に一番のレベルに、彼女の事をお願いしようとしたんですが」

と、そこでいったん言葉を切った仁川は手元のコーヒを一口啜ると、まるでそれが滑稽だとも言いたげに嘲笑じみた顔つきになって、改めて続きを口にした。「何やら、向こうさんでは、もうその『枠』が決定しているそうでした。しかも、普通なら条件の良い方に話が転がっても良さそうなものなのに、どうもその担当者が妙にその相手にご執心のように話をして。いやはや、経済的に暗い話の多い昨今、音楽業界も例外で無いというのに、これと言った事務所にも所属せずいきなりメジャー・レベルの目に止まって、ましてや確実に売り上げを期待出来る新人よりも重宝されるなんて、その人はよっぽど素晴らしい方なんでしょうね」。

瀬奈は今にも震え出しそうな体ながら、それでも歯を食いしばって耐えていた。だが、そんな健気さも、仁川にとってはサド気質を満足させるものでしか無さそう。

「平たく言えば、断られたわけですよ、こっちはね。とは言え、こちらも遊びでやっているわけじゃありませんし。それで素直に『じゃあ、また次の機会に』とは、なかなかいけないんですよ。私も、大した才能もない娘ながらも、それなりに華々しくデビューさせるという条件で、お金を貰っていますので」

彼の言いたいことは明白だった。同時に、彼がしたいことも。要するに、瀬奈を弄びたいのだ。

「そんなわけで、何とかこちらをデビューさせて頂こうと、私なりに色々と努力したんですがね。…驚きましたよ、いえ、嫌味でなく純粋にね。何かしらスキヤンダルの一つでも見つければ儲け物と、駄目元で知り合いの探偵に頼んでみただけなのに。まさかこんなネタを仕入れてくるなんて、さすがに予想していませんでしたから」

瀬奈の肩が、びくりと跳ねた。瞬間、仁川の顔がはつきりと愉悦に染まった。

「あなたの父親、強盗殺人事件の犯人なんですってねえ」

しゃっくりみたいな音が彼女の喉から漏れて、手は無意識にソファに並んで載せていたサックスのハード・ケースに触れていた。

仁川は三流役者よろしく、あたかも悲劇的な展開を表現する風に口調を変化させて、「勿論、あなたに罪は無いんでしょうねえ。いや、それどころか、当時まだ幼かったあなただっつて、ある意味では被害者の一人なのかも知れない」。ことさら大げさに表現される憐憫は、いつそ喜劇的だった。笑えるはずが無かったけれど。

「しかしながら、社会的にはやはり強盗殺人犯の娘。いかにあなたが優れた能力や人間性を持っていたとしても、世間はなかなか中身まで見て判断してくれませんからねえ。まあ、



この親にしてこの子あり、なんて言葉も往々にしてありますが」

「：私は、もう、あの人とは関係ない」

「ほお。なら、今すぐにこの話をあなたの会社や担当者にまで持っていきましょうか。いやいや、あなたはそこでも『私は関係ありません』と言っていれば良いんです。私はあくまでも事実をありのままに伝えるだけです。後の判断は、向こうの方々にお任せしますよ」

「ふざけないでっ」

いい加減に堪えきれなくなり、遂に瀬奈は大声で言った。視線に込めた憎悪で人を殺せるのならばどんなに楽になれるだろうかと、薄ら笑いを顔に貼り付けた仁川をきつくきつく睨み付けて、「何よそれっ。こんな卑怯な真似をしてないで実力で勝負しなさいよっ」。

「おお、恐ろしい。やはり、凶悪犯の血を引く人間は迫力が違いますね」

「だからふざけるなって言ってるん」

「ガキが寝言ほざいてんじゃねえぞっ」。店中に響き渡る激声が、彼女の抵抗を寸断した。仁川の目は、侮蔑の色に染まっていた。

「人殺しの娘の分際で、今さら夢ある若者を気取ってるんじゃねえよ。良いか、『実力』っつうのはな、そいつが持つてるもん全てを合わせて言うんだよ。演奏が上手いのも、親が金持ちなのも、どっちも等しく実力なんだよ。違うか？」

「それは：」

「だったらな、これがお前の実力なんだよ。親が犯罪者だって知られたくらいでびびっちまう程度の実力しか、お前は持つていなかったんだよ」

仁川の言葉は、それこそが人を容易に殺せる氷柱のごとく、瀬奈の心に深々と刺さって古傷を抉った。痕はあっても、確かに塞がっていたはずの傷なのに、溢れ出る血と痛みは生々しく鮮烈だった。

ややあつて、存分に瀬奈をいたぶれて気が済んだのか、仁川はまたわざとらしい丁寧口調に戻ると、「そう言うわけです。あなたにも、分かって頂けますよね」と、吐き出す言葉だけ低姿勢を装って言った。「あなたは若いし、そこそこのプレイヤーでもあるようだ。だから、あなたにはまだまだ『これから』と言う未来があるんですし、どうか今回はこちらに譲って下さいな。私だって、それまで潰そうとは思っていませんよ」。

「……………」

「それとも、こっちの損害分の金、全て支払ってくれますか？と言っても、現状たかがアルバイトで食いつないでいるだけのあなたに、払える額だとは思えません」

そして仁川は一言も返せない瀬奈を値踏みするように嫌らしく目を細め、「まあ、あなたほどの容姿があれば、それなりに稼ぐ方法もあるでしょうけど。どうです、いっそ音楽なんて諦めて、そっちの道へ進んでみては。あなたみたいな過去を持つ人間には、そちらの方がお似合いな気もませんか？」

瀬奈は応えなかった。膝の上で拳を握り、唇を噛み、太股に力を入れ、耐えていた。ただし、決して目を瞑ってしまわず、ただ仁川を睨み返す余力などなく。彼女はじっと、一口も飲んでいないコーヒーマグのカップへ視線を注いでいた。まるで、それに触れないことが最後の抵抗だとも信じているみたいに。

「それでは、私の用件はこれで終わりですので。ああ、勿論、此処は私が支払いますよ。」

その程度には、私も稼いでいますんでね」

その冗談が気に入ったのか、仁川はしばらくクスクスと笑っていたが、不意に真面目そうな顔になると「私が言うのも変ですが」と、最後にこんな台詞を残して去っていった。

「何と言うか、あなただって、本当に何から何までついていない人生ですねえ。本当に、可哀想なことだ」

それは、今度こそ嫌味や皮肉でなく、素直に同情している風な声音だったが、しかしつまりその事実こそが、何よりも明確に彼女を見下していると言う証明でもあり…。

瀬奈はずっと、そんな奴の為に泣いてやるものかと、ただひたすらに堪えていた。

3

鉄と鉄のぶつかる金属音が、響いて消えた。

「…え」

そして呆然と目を開ける彼女の前で、彼はその頭から銃口を離すと、「君はどうやら、案外ついでにいるのかも知れないよ」と、何とものんびりした声で言った。「本当についていないだけの人間なら、今ので確実に死んでいるはずさ」。

彼の手の中で開かれた銃のシリンダーでは、装弾数の丁度半分に当たる三発の弾丸が、ただどたった一発で確かに命を奪える弾丸が、一穴ずつ距離を置きながら等間隔に収まっていた。「確率は、二分の一。僕は、わざと弾の入っていない場所を選んだり、してないよ」。左手で軽く回転させられたシリンダーが、彼女が目を閉じていた間にも響いていた音を鳴らしながら、やがて右手の一振りです銃に収められた時、もう次に引き金を引いた際の結果がどんなものになるのか、一見しただけでは分からなくなってしまっていた。

すると、彼女は酷く冷めた口調で「…：…ついてないから、死ねなかったんじゃない」と、それこそが真実だとしても言わんばかりに、自嘲めいた笑みを浮かべた。

けれど、それでも彼はそんな彼女に向かって左右に首を振ると…。

「君は死ねなかったんじゃない。君はただ、生き残ったんだ」

そう言って笑った。

4

行く当てもなく、延々と夜の街を彷徨うしかない虚しさを、瀬奈はおよそ三年ぶりに体感していた。久しく気にした事もなかった、サックスのケースの重たさが、体を越えて心にまでのしかかっていた。一度でも足を止めてしまえば、今度はいつまでも同じ場所で立ち尽くし続けるしか無くなるだろうと、分かっていた。

瀬奈はとにかく、歩いた。ひたすら足を動かした。喩え、どれだけ進もうと彼女の道の果てには〈振り出しに戻る〉と言うマスしか並んでいなかったとしても、とにかくそこへ行き着くまでは歩き続けようとした。端から見ると、彼女にとっての未来はさながら、馬の顔の前にぶら下げられた人参のようだった。

「：何で、こうなるのかなあ」。それは果たして誰に対する問いかけだったのか。いや、正解は問いかけでさえなかったのだ。なぜなら、彼女はすでにその答を知っていた。つまり、「ついてないから、か：」。いつしか彼女は笑っていた。

瀬奈は考えた。そもそも、何が「きっかけ」であったのかと。ろくでなしの父親に母親共々虐待を受けていた時か、それともその父が遂に凶悪な犯罪に手を染めて捕まった時か、もしくは母親に連れられてその実家で暮らすようになった時か、はたまたようやく父から解放された母が新しい幸せを求めて一人で出て行った時か、いやいや孫を不憫に思った祖母らと三人だけの生活が始まった時か。

と、そこで瀬奈は気付く。簡単な話だと。詰まる所、確実なきっかけなんて、瀬奈がこの世に生まれてしまった瞬間なのだ。

その途端、彼女の中で一切の物事が馬鹿馬鹿しくなった。同時に、あまりにも悲しくなった。だって、そうだとすれば、一体どんな意味や価値を見出せると言うのだろうか。最初から存在自体が間違いである者に、どれほどの意味や価値が：。

：彼女にとって何よりも虚しかったことは、そんな愚考を即座に否定してしまう気力さえない、己の不甲斐なさだった。

ケースの取っ手を掴む右手が痛みだし、彼女はそれを左手に持ち替えた。すると右手が軽くなった代わりに、今度は左手が重くなり、やがて右手の時よりもずいぶんと早く、今度は左手が痛み出した。そこで彼女は仕方なく、再び右手に持ち替えようとして：：唐突に、悟ってしまった。

そうか、自分の人生はつまり、これと同じ事の繰り返しだったのかと、彼女は声に出さずに笑いそうになった。絶え間なく襲う重圧に潰されそうになり、それから逃れる為の手段にすぎり、楽になれたかと思えばすぐに新しい苦しみが現れ。何度も何度も逃げ道を崩されてはまた探し、救いを求めて迷走し、その結果次々に行き場を失い、やがては追い詰められてしまう。

だが、それでも潔く諦める事は、出来なかった。だからこそ彼女は止まるどころか一層に歩調を早めた。そうして足掻いた。進んでいる方向が本当の前なのか、それとも後ろなのか、いつそ左右なのか上下なのか、実際は足場のない空中でバタバタと足を空回りさせているだけではないのか、確信など持ていかなかったけれど、とにかく進もうとした。

と、やがて：。

「：此処は」

一体どれほどの時間が経っていたのだろうか。最早、両手から感覚が消え、怠さも疲れも痛みも失われてしまっていた頃、ようやく我に返った瀬奈が目にしたのは、郊外にある

大きな公園の入り口だった。

5

特別な理由など無かった。いや、もしかしたら「理由さえ無かった」と言う現実こそが、何よりの理由だったのかも知れない。しかしいずれにせよ、彼女には本当に何故わざわざ今日を選んだのかなんて考える気が無かったし、必要も無かった。だって、確かにいつでも良かったのだから。今日でなくとも、昨日でも、明日でも、いつだって良かったのだ。なぜなら、過去から未来へと続く彼女の時間の、何処を切り取った所で、何も変わりはないのだから。だとすれば、今日でも昨日でも明日でも、あらゆる時が最適なのだ、全てを終えるに相応しい日として。

瀬奈は父親を恨んでいなかった。いや、もっと正確に表せば、恨む為に思い出す行為自体を拒絶していた。だから最早、彼女の中で父親という存在は消滅していた。

また、彼女は母親を責めようとしなかった。むしろ、自分だって母の立場であれば同じ事をするだろうと、納得してさえいた。そして彼女は母親の不在を仕方ない結果だと割り切っていた。

祖父母の事は、きっと、嫌いじゃなかった。それどころか、心から瀬奈を憐れんでくれて、出来る限りの世話をしてくれて、本当に感謝していた。けれど、そうであったからこそ、祖父母の気持ちを考えようとはしなかった。

高校の同級生、その保護者、教師、事件の被害者、遺族、母の愛人、その他の人々……。それらに対する想いなど、良くも悪くも抱いていなかった。それでも強いて挙げれば、慰めを求めない代わりに放っておいて欲しいとだけ思っていた。勿論、どうせ無理だと諦めていたけれど。

瀬奈は、一人で夜の街を進んでいた。目的など特に定めていなかったが、その気になれば終着点は何処にでもあったから、とにかくそれまでは歩こうと思った。空っぽな心を運ぶ足取りはやけに軽くて、楽しさなんて微塵も無かったものの、苦しさも皆無だったから、少なくとも彼女自身はそれを虚無感でなく解放感だと考えた。プラスもマイナスも要らない、彼女はとにかくただただゼロになった。考えた。プラスもマイナスも要らない、彼女はとにかくただただゼロになった。

…でも、やはり世界は、彼女にとって優しくなかった。  
「助けてくれえっ」

我知らず大通りから離れ、歓楽街からも外れ、いつしか街の裏と表の境界線じみた場所に足を踏み入っていた瀬奈の耳に出し抜けに飛び込んできた声は、紛れもなく恐怖に染まった男の悲鳴だった。

「え？」と、瀬奈は反射的に足を止めて、前を向いた。表通りの華やかさも裏町のネオンもなく、気休め程度の街灯だけが静まりかえった辺りを薄暗く浮かび上がらせる中、地

面に這いつくばったサラリーマン風の中年男性が一人、鬼気迫る形相で彼女の方へと手を伸ばしていた。

「た、助けてくれっ、早くっ」

：理屈でなく、感情でもなく、ただ本能的に瀬奈は硬直した。全てに絶望していたし、一切を手放そうともしていたけれど、まだ自らの意思でそれを出来る程度には繋がれていた命が、彼女に恐怖を思い出させていた。

「早く助けてくれっ。なあっ、聞こえているんだろっ」。その場で立ち竦んでしまった彼女へ、焦った男の激声がぶつけられる。「早くしないとー」。

と、その時だった。

「ひいっ」

急に瀬奈から顔を背けた男が、肺から絞り出したような声を上げた。そしてまた彼女も、ほとんど無意識にその視線の行方を追って…。

「…え」。ようやく、気付いた。同時に悟った。

それは、あまりと言えば非現実的で、馬鹿馬鹿しい想像であったけれど、だからこそ彼女には今のこの場に最も相応しい状況だと感じられた。

瀬奈の視界に、まるで闇に溶けていく氷の映像を逆回しにしたかのごとく、夏前にも関わらず黒いコートを羽織った男の姿が音もなくゆつくりと現れていた。コートだけでなく、帽子もシャツもズボンも靴も、果ては僅かに覗く髪まで黒一色だった。

数秒後、声もなくその光景を見つめていた彼女は、やがて妄想じみた己の考えが正しかったと確信した。完全に闇の中から街灯の光の照らす範囲へと歩いてきた男の右手には、銀色に輝く拳銃が握られていた。それはあたかも、銀の銃こそが本体であると錯覚しそうな光景だった。

男が、静かに右腕を持ち上げた。じっと見ている、いつ動かしたのか判然としないくらい自然な動作だった。銀色の銃口が、路上に転がる男へ向いた。瀬奈はまばたきどころか呼吸すらも忘れていた。

「ひいっ」と、地面に尻を付けた中年男が、それでも必死に手足を使って後ろ向きに逃げようとした。立ち上がり、銃口などに目もくれず全力で走り去った方が、きつとまだ賢明な行動だったろうに、彼は最早、一瞬たりともそこから目を離そうとしなかった。

中年男が街灯の範囲の外に出てしまうまで、それほど長い時間は掛からなかった。そして結末は、ほぼ同時に訪れた。瀬奈は、意識の片隅で暗くて良かったと思っただけで、しばらくして、空気を思い切り平手打ちしたかのごとき轟音と、カメラのフラッシュさながらに刹那の閃光、それらの余韻が綺麗に消え去った後、黒い男がとても滑らかに瀬奈を振り返った。

遅まきながら、瀬奈は震える足を自覚していた。

距離にすればおよそ十メートル弱くらいか。今ならまだ逃げられたかも知れないけれど、しかし、その程度の間隔など彼の持つ凶器はいとも容易く越えてくるだろう。瀬奈自身、きつと自分は助からないと、分かっていた。

死にたくない、こんな状況になって、ようやく瀬奈はそう思った。どうせ叶わない幸福なのだから、だったら少しでも早く不幸を消し去ってしまいたいと、諦めていたはずなのに、体は勝手に命乞いを始めようとしていた。だが、それでも…。

「…はは、馬鹿みたい」

瀬奈は結局、そんな本心さえも、嘲笑の対象にした。

仮に、真に望んでいたものが生きること、幸せになることであつたとしても、今さらそれが分かつた所で何になると言うのか。むしろ、そんな現実を知つてしまつたせいで、余計に報われぬ想いに痛みを増大させられるだけだろう。そう、だとすれば、だ。

瀬奈は確信した。彼は、彼が、彼こそが、彼女を救う最初で最後の救世主だと。喩えそれが優しい天使でなく、非情な死に神であつたとしても、彼女の人生には、そんな終わり方こそがお似合いだと。

「あ、あの…」

瀬奈は思い切つて、彼に呼び掛けようとした。

すると男は―。

「あつ、待つてつ」

彼女の予想に反して、体を翻すと、無言のまままで再び闇の中へ戻ろうとした。

瞬間、彼女は駆け出していった。「お願いっ。待つてつ」。彼女の視界には最早、他のものは一切入つていなかった。彼女はただ、今にも溶けて消えてしまふような男の姿だけを追つていた。

大した距離など無かつたはずなのに、遂に彼のコートを掴まえた時、彼女は全身から汗を噴き出させていた。彼の肌には小さな珠一つ浮かんでいなかった。

「…お願い、待つて。お願いだから」

「……………」

「あなた、殺し屋なんでしょ…。だつたら、お願いがあるの」

男の目が、彼女へ向いた。静かな眼差しだった。或いは、思わず心の中にあるものを洗いざらい吐き出してしまいたくなるような、見る者を吸い込むような深い眼差しだった。

瀬奈は一度も視線を逸らさなかつた。

「…お願い。私を、殺して」

黒い双眸は、じつと彼女を見つめていた。

三年という月日は、果たして長いのか短いのか。少なくとも、瀬奈にとってはあつといふ間であつた気がしたし、だとすれば短かつたと言えるのだらう。だけどそれはきつと、時の流れも忘れてしまうくらい、彼女が懸命に走り続けてきたからだつた。彼女の人生に置いて、言つてみればこの三年間こそが、本物だつた。

勿論、それより以前の過去だつて、間違いなく重要なもののはずだつた。なぜなら、それがあつたからこそ、彼女は今を生き、未来を願えるのだから。けれど、そんな簡単で当

たり前の事実気付けたのも、やはりこの三年間の、いや、三年前の出会いのおかげだった。

彼女は、あの不思議な殺し屋と出会い、生き残り、そこで生まれて初めて「生きる」と言う覚悟を決められたのだ。そしてそれは、とっくの昔に捨てたはずの夢を、彼女に思い出させてくれた。

「：私、プロのサックス・プレイヤーになりたかったんだ」。それはさながら、かつて彼女が幼い頃に映画の中で見た、孤独や非難にもめげずに己を信じて生き続けていた孤高の女性サックス・プレイヤーの様な。

当然ながら、それはいきなり強烈な力となって、彼女を支えてくれたわけではなかった。それどころかむしろ、ほんの些細な憧れと言った方が正しそうな、そんな夢だった。

だけど、それでもその夢は、彼女にとって確かな価値を持つものだった。なぜなら、それはつまり証拠だったからだ。全てを否定してきた過去、最低で最悪でどうしようもないと絶望するしかなかった日々、そんな中にも、素直に夢を抱けていた瞬間は、ちゃんと存在していた。

瀬奈は、生きてみようと思った。せめて死ぬ前に一度だけでも、本気で夢を追いかけてみたいと、彼女自身も忘れていた理想を目指してみたいと、そう想った。

そして瀬奈はその決意を祖父母に伝え、迷うことなく高校を辞めた。

祖父母は反対しなかった。おそらく、胸の内では、普通の人間と異なる過去を抱えている彼女だからこそ、より一層に叶うのであればごくごく平凡で平穏な生き方をして欲しいと、そんな生活をさせてやりたいと考えていただろう。だけど、彼らは瀬奈の意思を受け入れた。

やがて瀬奈は祖父母の家を出て、近くのアパートで一人暮らしを始めた。彼らは仕送りや援助を申し出たが、彼女はそれを断った。己を過信したり、世の中を舐めたりしていたわけではない。ましてや祖父母との繋がりを切りたかったわけでもない。ただ、せめて出来る限りは、自らの力で生きてみたかったのだ。祖父母らがそれを承諾する代わりに出した条件は、「ならば、少なくとも大人になるまでは私達の目の届く範囲にいなさい」というものだった。瀬奈に断る理由など無かった。

こうして瀬奈はバイトで生活費を稼ぎながら、こつこつと金を貯めて、遂に念願のアルト・サクスを買った。決して高級な品ではなかったものの、それは紛れもなく彼女に純粹な喜びと達成感をもたらしてくれるものだった。

それから、瀬奈はひたすら吹いて、吹きまくった。誰かに師事出来るコネや金銭的余裕が無く、音楽的な才能の保証だって無くとも、構わなかった。迷ったり悩んだりする余力があれば、その分どうすれば上手くなれるか考えた。輝かしい成功を名も知らぬ神に祈る暇があれば、とにかく練習に打ち込んだ。要するに、彼女は必死だった。

最初の頃は唇が痛くなり、顎が疲れ、指が怠くなって腕の筋肉が麻痺するなんてざらだった。思い通りに行かない場合の方が多かった。だけど、楽しかった。それまでの辛い日々に比べれば、練習が上手くない程度、可愛らしいものだった。それどころか、僅かずつでも上達を感じられるだけ、遙かに有意義だった。誰かに責任を押しつけてしまえない代わりに、努力すればするほど成長出来る、そんな当たり前が、嬉しかった。

やがて、現在のアルバイト先である藤間の店と出会い、初めは単なるウェイトレスとし

て雇われ、しばらく後にその舞台に立たせて貰えるようになった頃には、瀬奈の実力も、まだまだ未熟ながらも、何とか人前で演奏出来る程度には向上していた。それが、今からおよそ一年半ほど前の話だった。

それ以降も、瀬奈は全身全霊で生きてきた。疲労感さえ充実感に変わった。そうして遂に、ロコミで広まった評判を頼りに店を訪れた音楽関係者の目に留まって、待望のデビューが決まった時、それは紛れもない幸福感になった。勿論、ゴールはまだまだ先だったけれど、それでもそこへ近付いている実感は、新たな気力となって全身を満たしてくれた。そう、彼女は本当に心から、生きていて良かったと、そう想っていたのだ。



瀬奈は軽く息を吐き出すと、ベンチの上にケースを置いて、隣りに腰を下ろした。

静かだった。ぐるりと回らせた視界に入るものと言っても、青白い光を放つ街灯に照らされた芝生に、幾つかの古びたベンチ、後は敷地を囲むように植えられている木々くらいだ。まるで、三年前のあの日に戻ったみたいだった。

「…あ、やば。ちよつと、泣きそう」

と、不意に瀬奈は両目に熱が宿るのを感じ、反射的に目の下に力を込めて堪えようとした。だが…。

「あ…。何か、最悪。私って、もうそれくらい力も無いんだ」

思い切り込めたはずの力は、しかしほとんど効果を發揮せず。まだ辛うじて涙は溢れていないものの、自嘲気味に呟いた言葉は情けないほどに震えていた。

「…はは、馬鹿みたい」

瀬奈は泣き笑いめいた表情を浮かべながら、思い出そうとした。果たして、あの映画の中で、主人公の彼女は泣いていただろうか。彼女の泣く場面は、あったらどうかと。

けれど、幾ら考えても正解は分からなかった。

「ま、どっちでも良いけど、さ」。そこで瀬奈は頭を振り、そんな考えを追い出した。詰まる所、あの彼女が泣いていようがまいが、瀬奈自身は泣きたくなかったのだ。なぜなら、それは認めてしまうことになると思っただからだ。所詮、彼女の人生などやはり最初から最後まで最低で最悪な物でしか無いのだと言う、負の言い訳を、都合の良い諦めを。そんな裏切り行為、彼女は絶対にしたくなかった。

「…もうっ。止め止め、うだうだ考えるのはっ」

そして瀬奈はことさら大きな声を出し、相棒に触れた。明らかな強がりだったけれど、ケースを開けて金属の肌に触れた途端、確かに気持ちはほんの少しだけ軽くなった。だから瀬奈は手慣れた仕草でサックスを組み立てた。

「やっぱり…。私には、これなんだな」。ストラップを首に掛けた彼女は、心地よい重さが伝わりると同時、さらに胸の内側が軽くなるのを感じた。

「…そうだよ。ちよつとくらいついてない事があったからって、別に死んだ訳じゃないもんね。うん、反省だな」



彼女は愛おしそうに相棒を撫でながら、改めて思い返していた。彼女の相棒は、彼女の方から裏切らない限り、彼女自身が己を偽らない限り、決して彼女を見捨てないのだ。

「さて、と」

軽く深呼吸、その後にマウスピースにそつと歯を当て、唇を添える。余計な力など必要ない。ただ、気の向くままに楽しめばいい。

やがて、艶めかしい体つきをした彼女の相棒が滑らかに歌い出した。いつだったか瀬奈は、あらゆる楽器の中でサクソスの音色が最も人間の声に近いと言う話を聞いたことがあったが、なるほど、その真偽がどうであれ、確かに彼女のサクソスは主の感情を見事に代弁していた。

幾ら広いと言え、夜なので音量はやや抑えつつ。その分、曲調に変化を付けて。時に楽しんで、時に悲しげに、時に激しく、時に優しく。彼女は夢中でサクソスに命を吹き込んだ。

すると、どうだろう。それはもしかしたら彼女自身も気付いていなかった事かも知れないが、それまでは即興的に奏でられていた旋律が、いつしかとある曲へと変化していた。未だに題名を持たないそれはまさしく、彼女の心の奥底に大切にしまわれている想いを紡がれた曲で、また同時に彼女にデビューのチャンスを与えてくれた最高の――。

――唐突に芝生を踏む誰かの足音がして、瀬奈は我に返って演奏を止めた。と、その直後。

「：あ、ごめん。邪魔しちゃったね」。足音を鳴らした張本人である彼は、本当に申し訳なさそうな顔で、でも、そんな中にも優しく微笑んでいるような雰囲気を感じながら、「気にせず続けてよ」。

「：嘘、でしょ」

けれど瀬奈は、それきりサクソスを持ち上げること出来なかった。「嘘：。え、そんな、だって：。え、嘘でしょ：」。目の前にある現実にも関わらず、なかなか信じられないのか、瀬奈は間抜けな顔で同じ単語ばかりを繰り返していた。でも、その声の震えを聞けば、彼女が実は嘘でも構わないから信じたいと想っている事は明らかだった。

無論、彼は夢でも幻でもなく、そこにいた。

「久しぶり、だね。元気にしていー」

「会いたかったっ」

その証拠に、言葉の終わりを待たずにサクソスごと飛び込んできた彼女を、彼は両者を傷つけないように優しく受け止めていた。「ずっと、ずっとあなたに会いたかったっ：」。瀬奈はコートを掴んでシャツの胸元に額をこすりつけ、何度も何度もそう繰り返した。さつきはあんなに堪えようとしていた涙も、今はそんなことを考える間もなく溢れ出していた。

「はは、照れるな」

帽子もシャツもズボンも靴も髪の毛も、何もかもがああの頃のままだに、漆黒の殺し屋は言葉通りの表情を浮かべていた。

「元気にしてたかい」

サックスをしまつてベンチに座り、しばらく。やっと落ち着いていた瀬奈だったが、けれど隣で並んだ彼がそう問うた直後、再び勢いを取り戻して彼に詰め寄った。「元気にしてたかい、じゃないわよっ」。

「え？」

「あれから私があなただをどれだけ捜したか、ちつとも分かってないでしょっ」

「ご、ごめん」。彼はその剣幕に困ったような、それでいて、その言葉に喜んでみいる風な表情で謝った。

瀬奈は「ま、まあ、分かれば良いんだけど」と、そんな彼の顔を見た途端、急に物分かりが良くなったみたいに大人しくなった。それから、口の中だけで何やらごによごによと。すると彼は穏やかな笑みを浮かべて、「でも、元気そうで良かったよ」と言った。

「：うん、あなたも」と、瀬奈が何とか声を整えて返すまで、彼はずっと待っていた。それでようやく、彼女も普段の口調で話し始められた。

言いたいことは、考えるまでもなく次から次へと彼女の頭に浮かんできた。彼はその全てを楽しそうに相槌を打ちながら聞いていた。

「へえ、凄いいじゃないか。音楽会社の人に目を付けられたなんて」

「でしょ。おかげで、このまま頑張れば、もしかしたらいつか本当にデビュー出来る日だって、やって来るかも知れないんだから」

瀬奈は、笑っていた。だって、笑いたかったからだ。せつかく彼が目の前にいるのに、笑顔以外の表情なんて一度も見せたくなかった。

「もうさ、毎日が最高なの。何て言うか、つきまくりって感じだよ」

「そんな。それは運なんかじゃなくて、君が頑張った成果だよ。純粹に、君の実力さ」

「そ、そうかな」

「そうだよ。僕は、恥ずかしながら音楽の事にはまるで詳しく無いけれど、それでも、さつき聞いた君の演奏は、とても素敵だったと思うよ」

「：それ、本当？」

「うん。本当に、素敵だった」

「：：：：。だったら、嬉しいな」。瀬奈は、思わず、また涙をこぼしてしまっそうになった。まさか、こんなにも素敵瞬間が訪れるなんて、夢ですら描いていなかった。他の誰からの称賛よりも、いっそ数多くの演奏家を見てきた業界関係者に認められた評価よりも、素人の彼の感想が最も胸を一杯にしていた。しかも、聴いて貰えた曲が例の曲であったなんて、そんな偶然は、最早どんな現実や幻想よりも：：。

「：：不思議な人だよ、殺し屋さんって」

瀬奈は泣いてしまうより早く、目を細めた。作り笑いを貼り付ける必要など無く、彼の顔を見ただけで、それはいとも容易く成されていた。「殺し屋さんって、まるで相手の心

の中を全部分かっているみたい」。

「まさか、そんな力は持っていないよ」。彼は柔和な表情ながらもあつさりと首を横に振って「残念ながらね」と応えた。

瀬奈はかすかに不満そうに唇を尖らしたものの、しかしすぐさま「でも、やっぱり嬉しい事には違いないし」と返した。「だから、ありがとう」。

彼は何も言わずに笑っていた。

「そうだった」

と、いきなり瀬奈が大声を発したのは、束の間の沈黙を挟んだ後だった。

「どうしたの、急に」

「私ね、今、もの凄く良い事を思い付いたんだ」

「もの凄く良い事？」

「そうだよつ。ねえ、聞きたい？」

「そうだね、是非とも」

「仕方ないなあ」と、勿体ぶるように前置きしてから、瀬奈はその妙案を口にした。「殺し屋さんがね、『殺し屋』なんか辞めて、私のマネージャーになるのっ」。

「え…」。彼の目が、少なからず意外そうに見開かれた。

「あ、いや、そりやまだプロになつてないけどさ」と、思いがけない反応を返されて、瀬奈は慌てて言い繕うように早口でまくし立てた。「でも、それでもさ、私、今よりもっと頑張るからさ。それで、いつなれるのか分からないけど、だけどいつかきつとちゃんと本物のプロになるからさ。だからさ、そうしたら、殺し屋さんが私のマネージャーになつてよ」。

「でも、僕は—」

「大体さ、今時そんな仕事も流行んないって。それに、それにだよ、その、もしもそうなら、そうしたらいつでも好きな時に私の曲を聴かせて上げられるじゃない。新曲だつて、一番先に聴けるんだよ。だから、ね。そうしょ？」

「……………」

「音楽の事なんか、これから勉強すれば良いんだしき。大丈夫、十分に間に合うって。あ、そうだ。とりあえず今度にやる私のライブには絶対に来てね。一番前の特等席を用意しておくからさ。約束だよ」

瀬奈は喋った。喋って、喋って、とにかく喋って、笑い続けた。「あ、でも、そしたらもう殺し屋さんが『殺し屋さん』じゃなくなっちゃうね。呼び方、変えないとね」。それでもしていなければ、彼に抱きついて……いや、泣きついてしまったかもしれない。だから彼女は、そんな行を決してしたくなかった彼女は、必死で自らを支えていた。辛さを誤魔化していたのではない。彼女はただ、今度こそ彼に对等な相手として見て貰いたかっただけだ。もう守られて救われるだけの存在ではないと、ちゃんと自らの足で立っている一人の女なんだと、彼に知って欲しかった。

すると彼は、そんな彼女の気持ちを知ってか知らずか…。

「…それは、きつと、とても楽しい毎日だろうね」

瀬奈が、本当に心から欲しい一言を与えてくれた。

だから彼女はより一層に声を明るくさせて「でしょっ？なら、決定ね。絶対だよ、約束

だよっ?」。

「ははは」

そしてまた同時に、その一言は、瀬奈にちよつとした勇氣も与えてくれていて。

「じゃ、じゃあさ…」

彼女は遂に、ずっと聞きたかった事を言葉にした。「…その、殺し屋さんの名前、教えてよ」。

「名前?」

「だ、だつてさ、もう『殺し屋さん』って呼べなくなるわけだし。そりや、次からは『マネージャー』って呼ぶんだけど。でもさ、やっぱり、こつちとしても本名くらいは把握しておかないと、困るでしょ」

「困るの?」

「困るわよっ。例えば、ほら、大きな音楽祭の現場とかで、他のアーティストのマネージャーもいたりする中ではぐれた時、私があなたを捜すのに苦労するじゃない。ちゃんと名前と呼ばないと、全員が振り返るわよ。そうでしょ」

「なるほど。確かに、そうかもね」

「そう。そうなのよ。だから…」

瀬奈の視線から、感心している風に笑う彼は一度も目を逸らさなかった。たつたそれだけで、彼女は何度でも、泣きそうになった。

「うん。それじゃあ、改めて」

その笑みは、柔らかくて、温かくて。彼女にとってはさながら幸福の象徴で。

「僕の名前は—」

罪を犯しすぎているはずの男を、それでも瀬奈は、心から愛おしいと想っていた。

終わりであり、始まりになる………はずだったライブ。

だが、瀬奈はもう迷わなかった。だつて、それは本当に、また新たな始まりとなるライブだったのだから。

どうせ、ついていけない人生なのかも知れない。所詮は、最低で最悪だと隣れまれる人生なのかも知れない。だけど、それでも彼女は鼻で笑って明るく前を向く。「だからどうしたつて言うのよ」と。

なぜなら、彼女は見つけられるのだから。事実、彼女は確かに見つけられたのだから。そんな中に置いてさえ、最高だと思える瞬間を、紛れもない幸福を。絶望を気取って諦めた振りしながらも、心の奥底ではずっと求め続けていたものを、もうすでに、それも一つだけでなく。

だから彼女は進むのだ、途中に転がる不運や不幸をまたいで、信じる方へと。それがつまり「生きる」と言う行為なのだ、大好きな彼から教えられていた。

「そろそろ時間だぞ。皆さんお待ちかねだ」

「うん、ありがと。マスターも、楽しんでよ」

そして瀬奈は珍しくカウンターから舞台袖へとやって来ていた藤間に笑い返すと。

「今夜の私は、凄いいんだから」

相棒を掴んでステージに進んだ。



店の入り口の前で、彼はじっと立っていた。少し前まで周りにいた他の客達は、すでに全員が中へ入っていた。時刻はもう夜の七時。今から、彼女の最後のライブが始まる。

彼にはまるで別世界の話だが、それでもきつと本格的にデビューすれば色々と厳しい現実には直面する場面も多いだろう事は想像に難くなかった。だとすれば、それは彼女にとって最後のライブになるのだ。まだまだ己の想いのみを自由に吹いていられる、無名の新人としての最後のライブに。

もしかしたら失敗するかも知なんて、欠片も心配していなかった。だって、彼女はあれほど素晴らしい演奏家なのだから。あんなにも心が震えてしまう曲を聴いた経験など、どれだけ記憶を掘り返しても彼は思い出せなかった。

そして、だからこそ彼は…。

「…ごめんね。僕はもう、君と一緒にには行けないんだ」

入り口に背を向けると、静かに浮かべていた微笑みをその場に置いて、夜の街へと歩き出した。

あつという間に、黒い姿は闇に紛れて見えなくなった。



彼がその席にいなかった時も、瀬奈は驚かなかった。勿論、もの凄く寂しかったけれど、それでも驚きはしなかった。しばらくすれば少し遅れて来てくれるのだろうと、別の期待を抱きもしなかった。彼女はただ、最初からもしかしたらと思っただけだ。そう、もしかしたら、本当に来てくれる事だっただけなのかも知れない。彼女には最初から、どれだけ彼はきつと来ないだろうと、分かっていた。なぜなら、彼はとても、いっそ優しすぎるほどに優しい、殺し屋なのだから。

だから彼女は、自らの演奏を聴きに來てくれた祖父母を初めとする大勢の客の前に堂々と立ち、胸の中にある全てを旋律に変える。誰よりも彼に伝えたい、誰よりも彼に届きたい、大切な大切な想いだからこそ、彼女の為に訪れてくれた人達に聴いて貰う為に。それ

は、彼を想って彼の為だけに作られた始まりの曲で、やっと題名を与えられた曲で、己の決意の象徴として奏でるに最も相応しいと信じられる曲だった。

瀬奈は吹く、何もかもをさらけ出そうとするかのごとく。

なぜなら、彼女は演奏者で、そこはステージなのだから。  
だから彼女は、全身全霊でライブするのだ。



「失礼。あなたが『仁村』さん、ですか」

全てが上手くいく前祝いとばかりにクラブで豪遊した後、ちよつと風に当たってから大通りでタクシーを掴まえようと、鼻歌交じりに深夜の街を歩いていた仁村は、不意に横から発せられた声に反射的に足を止めた。

いつからいたのか、そこには街の灯りの隙間に溶け込むように、黒ずくめの男が一人で立っていた。

「：誰だ、お前？」

ほろ酔い機嫌だった顔つきが、一転して胡散臭そうなものへ、さらにはやがて「おい、誰だって聞いてんだよ」と凄みを利かされたものへ変わった。けれどその不思議な男は、自身へ向けられた敵意など意に介した様子もなく、きわめて自然な仕草でコートの内側へと右手を差し込んだ。

「な、何だよ：」。ナイフでも取り出されると思ったのか、途端に仁村の表情に緊張が走り、彼は慌てて周囲に視線を向けた。だが、ついていない事に、辺りには誰もいなかった。

仁村は急いで、大通りに向かって駆け出そうとした。しかし、それよりも僅かに早く、黒い男が語り始めた。「滑稽な話さ」。悲しみも寂しさもない、かといって単なる虚無とも異なる、一切を悟って受け入れている風に静かな声だった。

「僕には本当に、誰かの心を分かってくれようと思ってる力なんて、無いんだよ」

それは明らかに独り言で、しかも、他人には到底意味を理解出来ない言葉だった。けれど、そのはずだったのに、何故だか仁村はそれに意識を奪われた。：それが、彼の未来を決定づける要因となった。

「ひっ」と、彼が懐から取り出したものを見た瞬間、仁村は信じがたい光景を目の当たりにした臆病者に相応しく、逃げようと試みる余裕すら失った風にその場で凍りついた。彼は、そんな仁村にやはり淡々とした眼差しのみを浮かべて、滑らかな動作でその頭に銃を向けた。銀色の銃口の真ん中には、漆黒の穴が一つ開いていた。

「僕にはただ、聞こえるだけなんだ。相手の、悲鳴が。それを隠そうとすればするほどに、一層に激しくなる、心の悲鳴が」

「あんた、さつきから、何を言ってる：」

「僕力なんて、所詮はその程度なんだ」

「：待て。待ってくれ。金か？金だろ？」

「そして、そんな僕に出来る事だって、結局は酷く身勝手な事だけで」

「だったら好きなだけやるから、な？金なら、ちゃんとあるんだよ」

「それが本当に誰かの為になっているのか、それともただの独善に過ぎないのか。僕には、ちゃんと確かめる事さえ出来ないんだよ」

「本当だって。もうじき大金が入ってくるんだよ。だから、なあっ」。必死で懇願する仁村の前に、けれど彼は銃口を微動だにさせぬまま、遂に撃鉄を起こし……。

「詰まる所、僕は」

「ちよっと待っ」

「お前と同じ、卑怯者なんだよ」

仁村の声を掻き消す音が響き渡り、その体が崩れ落ちた。それきり、仁村は二度と動かなかった。

灰色の地に散った暗い血を見下ろしもせず。やがて銃を再び懐へしまった彼は、足音も立てずに闇の中へと消えていた。



全ての演奏が終わった時、瀬奈は泣いてなどいなかった。なぜなら、涙としてこぼす事さえ惜しんで、ありったけの想いを曲に捧げたのだから。

心地よい拍手と歓声に包まれる中。

表情を作る気力も残っていないほど全てを出し切った彼女の顔は、とても自然に笑っていた。

### エピソード

ある晴れた日の昼下がりに、とある街の小さなCDショップで、また一人、「彼女」のアルバムを手にとっている客がいた。店内では、その中でも特に人気の高い一曲が、適度な音量で流れていた。

「お客さんも、インストウルメンタルとかが好きなんですか」

と、他に客もおらず暇だったのだろう、白髪が目立ち始めた男性の店主が気さくな感じで話し掛けると、彼は一瞬だけきよんとした表情を浮かべてから、少しばかり恥ずかしそうに微笑んだ。「いえ、実は音楽にはあまり詳しくなくて……。すいません、その、インストウ何とかと言うのは？」。

すると店主は、そんな全身黒づくめの客の答えに、全く馬鹿にした様子もなく、それど

ころかむしろ楽しそうな顔つきになって「歌のない、楽器演奏だけの曲の事ですよ」。

「なるほど」

「しかし、となると、もしかしてあなたも彼女のファンですか」

店主の問いに、彼は素直に頷いた。「ええ。こんな僕でも、彼女の曲だけは本当に良いなと思うんですよ」。

店主の表情がいよいよ嬉しそうなものになった。「うんうん。良いですよねえ、彼女。まだデビューして日も浅いし、ついこないだは少しばかり昔の事でマスコミに叩かれたりもしてましたけど。でも、そんなのを軽く吹き飛ばしてしまうくらい、良い曲なんですよ。実際、面白半分で買いに来たお客さんも、すぐに本当に好きになってしまいうんですよ」。

「彼女の曲を聴いていると、僕まで元気になれるような気がするんですよ」

「そうでしょう、そうでしょう。いや、普段は音楽を聴かない人でも、皆そう言うんですよ。それって、実はとても凄い事なんですよね」と、店主の話はまだまだ続きそうだったけれど、彼はその隙間を上手い具合に見つけて、「それじゃあ、これを頂けますか」。

果たして店主はかすかに物足りなさそうな気配を見せたけれど、しかしすぐさま商売人の顔に戻って「はい、ありがとうございます」。

やがてアルバムの入った袋を受け取った彼は、よほど気に入られたのか、わざわざ見送りに出てくれた店主に軽く会釈をして、街の中へ歩き去ろうと…。

「…あの、すみません」

だが、彼は数歩も行かぬ内に立ち止まり、それから再び店の前へと戻ってきた。

「どうかしましたか」と不思議そうに小首を傾げた店主に、彼はおずおずと言った感じで、「どんな曲を聴けば良いんでしょうか」。

「は？」

「その、何て言うか、僕も少し音楽を勉強してみたくなって…。やっぱり、もう遅いでしょうか。今までもろくに音楽を聴いた経験も無い人間じゃ、今さら—」

「いやいやいやいやいや」と、彼の言葉を早口で遮った店主の目は、先ほどよりも遙かに輝きを増していた。「音楽を楽しむ事に早いも遅いもありませんよ」。

彼はそんな店主の勢いに少しだけ呆気にとられた風だったものの、けれどややあって「それは、安心しました」と微笑んだ、心から嬉しそうに。

「どうぞ、中へ。いえ、実はね、お客さんにお勧めしたかった曲がまだあるんですよ」

そして彼は促されるままに改めて店の中へと足を踏み入れる、店主の音楽談義をにこやかに聞きながら。

店内では丁度、彼女の曲がクライマックスを迎えていた。

〈了〉